

【濟州紀行 ④】

足立 龍枝

2019年5月発行のむくげ通信294号で「サミル万歳運動は、なぜ、済州城内（ソンネ）でなく、「朝天」が始まりだったのか……と書きました。その続きを報告いたします。

7～8年前、済州中央路のとある書店で「青少年のための済州歴史」という本を見つけました。すらすらと読めない私は、見出しと写真を楽しんでいましたが、今年になって抗日運動が詳しく書かれていることに気づき、資料として利用しています。9人の済州の中・高校の教員が定期的に集まって、時間をかけて完成したものです。ひとりの高校教員李映權氏とは、偶然3月にお会いすることができました。玄善允氏翻訳の「済州歴史紀行」の原作者でした。

・万歳運動は、なぜ、済州城内でなく“朝天チョチョン”が始まりだったのか。

朝天は、朝鮮時代、重要な補給路（平子浦口）として、本土と海上貿易を通して富を積み上げてきた地域である。朝鮮後期になれば、その富を元に、両班になる人もいた。代表的な家門がまさに朝天の金氏である。彼らは財力を基に、子弟を日本やソウルに留学させることができた。その時、留学させた子弟によって、新しい考え方や消息などが伝えられた。



従って、朝天には抗日運動に参加した人物が多い。東亜日報創刊當時主筆であった済州最初の社会主義者の金明植・大阪の労働運動の大父（~~大半~~大将という感じ）金文準は、大阪の日本社会運動現場の塔の名簿に載せられていて、名声が高い（写真）。女性として日本で労働運動を展開した金時淑・独立資金募金運動を行なった金云培・光州学生抗日運動に参加した金時成と金時璜・共産主義抗日運動を繰り広げた金時容・金明植の息子の金甲煥等が代表的な人物である。



金文準



JR 大阪城公園駅下車公園側すぐ。
公開日はメーデー・10/15



【済州紀行 ⑤】

足立 龍枝

2019年6月、バスで済州市内から東の方へ向かった。(地図は前ページに)

目的は、1932年の済州海女抗日運動の現場を歩くことだった。

海女抗日記念塔



運動は、細花（セファ）・終達（チョンダル）・吾照（オジョ）・始興（シフン）・城山（ソンサン）・牛島（ウド）の海女たちが主役だった。



海女たちが、海女の仕事（ムルジル）をこなしながら、夜学校を通して成長し段階していく様子を詳しく知りたかった。

尊敬されていたリーダー、夫春花（1908～1995）・金玉連（1907～2005）については、今年発行された「西間島（ソガンド）に野花咲く」200人の女性抗日運動家の中から、上の2人が登場する2巻と5巻を見せてもらった。そして、「済州歴史紀行」と合わせて、海女たちの抗日運動を詳しく知ることができた。

「西間島に野花咲く」

1932年1月12日の第2次示威行進闘争の部分を取り出してみると、その日は、新任の田口島司（警官のトップか）が、巡察で細花に立ち寄る予定であり、市が立つ日でもあった。

現済州海女抗日運動記念塔を出発した終達・吾照・始興・城山・細花・牛島等一帯周辺から集まった海女約700名が、この日巡察した日本人済州島司田口を取り囲んで、不当な搾取に対して抗議した。



現在、東部警察署旧左（クジャ）派出所

に及んだ。

海女たちが、朝、ムルジルに行く前に

海岸で会議や学習会をしている

夜学校

海女たちの抗日運動のエネルギーになったのは、夜学校での学習が大きい。小説・映画「常緑樹」に描かれていた農村啓蒙運動家・崔容信先生の言葉「知は力なり 学んでこそ生きる」を目指し、夜学校が維持されていった。

守口夜間中学で学習していた女性・薛（ソル）桂喜さんは、渡日する前に故郷馬山（マサン）で夜学校を体験した人だ。ソウルで勉強してきた村の若者が教えてくれたと言われたことがある。

「薛さんは夜学校へ行ってたから、ハングルも掛け算の九九もできるんや」と、周りの少し年下の1世2世の生徒から羨望の眼差しで見られていた。大阪でも夜学校があった。その夜学校で学んだ済州旧左面出身のオモニムを誇りに思っています、といわれた息子さんが、常に頭に浮かんでくる。岸和田紡績でも、済州道・慶尚道の女工を中心に秘密裡に夜学校が行われていた。(金賛汀さんの著書より)



1930年代の新聞より